

Title	飛騨国高山二之町村の宗門人別改帳： 史料の特徴と1773年～1800年の人口・世帯
Sub Title	Characteristics of the shumon-ninbetsu-aratame-chō : Takayama Nino-machi district
Author	岡田, あおい(Okada, Aoi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2024
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.153 (2024. 3) ,p.211- 239
JaLC DOI	
Abstract	<p>The primary purpose of this research paper is to define the features of the shumon-ninbetsu-aratame-chō (hereafter SNAC) of Takayama Nino-machi district, as found between the period of 1773 and 1800. Another purpose of this paper is to examine the characteristics of the population and households during this period from a substantially detailed documentation in the SNAC of Nino-machi district.</p> <p>Throughout the above mentioned period, the population had decreased, but it had significantly reduced twice between 1784 and 1789. The number of males was slightly higher in the gender ratio and this balanced ratio in Nino-machi is likely to be the result of the presence of a social structure that required female labor.</p> <p>The number of households remained around 700 throughout the period. Looking at the number of households by type of ownership, the number of self-owned households remained stable, whereas the number of rented houses fluctuated. The average household size was 3.7 people. Self-owned houses had larger households than rented ones, and this difference stayed almost same throughout the observation period.</p> <p>Another demographic trend noticed in Nino-machi is that many house owners could not keep their houses. They had to pawn them, sometimes to their tenants who acquired the properties for loan recovery. Many large turnovers between house owners and renters were observed.</p> <p>By defining the main features of the SNAC of Nino-machi district, I will elaborate and examine the above mentioned observations.</p>
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article

URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000153-0211
-----	---

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[研究ノート]

飛騨国高山二之町村の宗門人別改帳

—史料の特徴と 1773 年～1800 年の人口・世帯—

岡 田 あ お い*

**Characteristics of the Shumon-ninbetsu-aratame-chō
Takayama Nino-machi District**

Aoi Okada

The primary purpose of this research paper is to define the features of the shumon-ninbetsu-aratame-chō (hereafter SNAC) of Takayama Nino-machi district, as found between the period of 1773 and 1800. Another purpose of this paper is to examine the characteristics of the population and households during this period from a substantially detailed documentation in the SNAC of Nino-machi district.

Throughout the above mentioned period, the population had decreased, but it had significantly reduced twice between 1784 and 1789. The number of males was slightly higher in the gender ratio and this balanced ratio in Nino-machi is likely to be the result of the presence of a social structure that required female labor.

The number of households remained around 700 throughout the period. Looking at the number of households by type of ownership, the number of self-owned households remained stable, whereas the number of rented houses fluctuated. The average household size was 3.7 people. Self-owned houses had larger households than rented ones, and this difference stayed almost same throughout the observation period.

Another demographic trend noticed in Nino-machi is that many house owners could not keep their houses. They had to pawn them, sometimes to their tenants

* 慶應義塾大学文学部社会学専攻教授

who acquired the properties for loan recovery. Many large turnovers between house owners and renters were observed.

By defining the main features of the SNAC of Nino-machi district, I will elaborate and examine the above mentioned observations.

はじめに

歴史人口学は、1950年代後半フランスで誕生した。この学問は1960年代半ばに速水融によって日本に紹介され、研究が開始した。フランスでは史料として小教区帳簿（registres paroissiaux）を用いるが、日本では主に宗門改帳¹が利用される。日本の歴史人口学では、速水融が考案した史料の整理方法に倣い研究が進められてきた。宗門改帳から基礎シート（Basic Data Sheet：以下 BDS と略す）を作成し、これをデータベース化し分析をおこなう。ヨーロッパの歴史人口学は史料の制約から動態人口の研究に限定されるが、宗門改帳を史料とする日本の歴史人口学は史料の性質から、動態人口に加え静態人口の分析、さらに記載単位を用いた家族（世帯）の分析ができる。この点がこの史料の最大の魅力であり、日本の歴史人口学の強みでもある。

T. C. スミス（Thomas C. Smith）は、近世日本の大都市や城下町は、例外はあるものの1700年以降人口が停滞したと述べ、その理由を城下町の衰退と在郷町の人口成長のメカニズムから説明した（スミス 1977）。ヨーロッパの都市とは異なるこの近世日本都市の人口メカニズムは興味をかきたてられるが、歴史人口学の都市研究は急速には進展しなかった。研究は、主に農村の宗門改帳を史料に用いた人口指標の国際比較、そして家族社会学との学際的研究によって成果を蓄積していった。都市の人口に関する研究が難航している最大の理由は、都市の史料が僅少であり、しかも残存期間が短く欠年も多いためである。しかし、このような制約のもとで、大坂（菊屋町）、奈良（東向北町）、京都（衣棚町・四條立売中之町・西堂町・花車町・志水町など）、飛騨高山（二之町）、長崎（桶屋町）といった

都市、あるいは在郷町郡山、八王子横山宿の研究がおこなわれている²。近世都市の研究は、主に人口移動に関心が寄せられている。速水融は「農村から人口を引き寄せては殺してしまう一種の蟻地獄としての機能を持っていた」という、いわゆる都市蟻地獄説を提唱し、この説をめぐり都市-農村間の人口調整メカニズムについての議論がなされてきた（速水・内田 1971: 251, 速水 1992: 278）。佐々木陽一郎は、飛騨高山一之町と二之町の宗門人別改帳を用いたシミュレーションによる都市の分析からこの説を支持した（佐々木 1977）。しかし、斎藤修は、都市の死亡率の絶対的な高さとは低有配偶率水準を要因とする出生率の低さを都市蟻地獄説の特徴とし、近世都市の死亡率が出生率を上回っていたという直接的なデータが乏しいこと、18世紀から19世紀にかけて江戸の性比が急速に改善されていることから雇用構造の変化が結婚と家族形成の在り方に影響を及ぼしている点を江戸と大坂のデータから分析し、この定説にはまだ検討の余地が残されていると言及している（斎藤 1987: 121-150）。A. シャーリン（Allan Sharlin）は都市住民の階層による人口再生産構造の違いを指摘し、修正仮説を提示した。都市蟻地獄説³は、流動層にはあてはまるが、定住層にはあてはまらないと主張している（Sharlin 1978）。さらに、長崎桶屋町の人口分析をおこなった友部謙一、在郷町郡山の人口分析をおこなった高橋美由紀もこの説がそれぞれの研究対象地域には当てはまらないと述べている（友部 1999, 高橋 2005）。

近世都市の歴史人口学の研究の中心は人口指標の分析にあり、家族（世帯）の研究は乏しい。近世都市の人口移動は農村に比べ激しいことが明らかにされているが、果たして、その人口移動は、個人による移動（奉公）が中心なのか、家族（世帯）の引っ越しによるものが中心なのだろうか。都市の家族（世帯）構造は農村の家族（世帯）構造と異なるのか。浜野潔は京都縁辺部志水町の借屋世帯の転出入について分析し、借屋世帯の4割が1年以内に転出し、平均居住年数は約3年であることを発見している（浜

野 2007: 113–143). また、1859 年から 1863 年までの京都の 16 の町の宗門改帳の横断面的分析から世帯構成の特徴として世帯内の子ども数は少なく、嫁・婿といった続柄のものが農村に比べて非常に少ないと述べている(浜野 2007: 147–170). 近世都市の家族の暮らしは、家族社会学の立場からばかりでなく、現代に生きる私たちにとっても興味深いテーマである。

先行研究から、近世農村の家族(世帯)の研究をおこなう場合、60 年程度連続する史料が残存していれば家族周期の観察をすることができることは分かっている。したがって、今後農村の家族(世帯)との比較研究をするためにも、60 年程度連続する都市の史料が存在することが望ましいのだが、飛騨高山の宗門人別改帳⁴ はこれを可能にする。飛騨高山の宗門人別改帳を史料に用いた先行研究には佐々木陽一郎による一連の人口指標に関する研究がある。佐々木陽一郎が作成した BDS は、岡田研究室が引き継ぐことになり確認作業を行なってきたが、佐々木が作成した当時は整理方法も定まっておらず、試行錯誤が繰り返されていたようでこのシートを再利用することは難しかった⁵。そこでマイクロフィルムに撮影されている飛騨高山の宗門人別改帳をデジタル化し、新たに BDS を作成することから本研究を開始することにした。本稿は、飛騨高山二之町村の宗門人別改帳の特徴を明らかにし、観察開始年より 27 年(1773 年～1800 年)分の BDS を整理し、人口と世帯の趨勢について記述することが目的となる。

1. 飛騨高山町と宗門人別改帳

『高山市史上巻』によれば、高山町は、高山城主金森長近・可重の時代に基礎が確立し、三代目重頼の時代に発展した⁶。城下町は宮川以東(現在の江名子川以南)の地に築かれ、左京屋敷、向屋敷の建設に伴い江名子川以北、そして宮川以西の地域に拡大していった(高山市 1981: 220–21)。空町と呼ばれる高台に侍屋敷、その西側の低地、下町に町人屋敷を、町の東北のはずれに浄土真宗照蓮寺を設立し、その周辺と東山一帯に寺屋敷を

配置し形成された（大塚 2018: 223）。下町は 3 つの南北の筋を設けて一番町、二番町、三番町が築かれた。この三つを本町という。町は次第に北に発展し、一之新町、二之新町、下新町が、また向町、下向町が宮川の西に誕生した。元禄 5（1692）年 7 月には旧金森領飛騨一国は幕府直轄領となり、法制的に一番町は一之町村、二番町は二之町村、そして三番町は三之町村と村扱いになった（末田 2018: 189）。幕命を受けた大垣藩が実行した元禄 7（1694）年の飛騨総検地によると、二之町、二之新町、そして下新町からなる二之町村の石高は、49 石 9 斗 3 升 1 合であり、面積は 5 町 4 反 2 畝 1 歩（屋舗）である（田中貢太郎 1925: 150）。寛政元（1789）年の二之町村の石高は 3.2 倍増加し、158 石 1 斗 1 升 5 合になっている。このように石高が急増したのは、『岐阜県史通史編 近世下』によれば、金森時代の侍町が転封により町人町になるとともに一之町村、二之町村、三之町村の南北に次第に市域が拡大し、これらの新町人町が三町村のいずれかに行政的に統括されていった、いわば「新しい町の三ヶ町村への配属替え（岐阜県 1968: 760）」による⁷。

一之町村、二之町村、三之町村はいずれもいくつかの組に分かれており、各組に組頭が一人置かれ、五人組頭と区別するために町組頭と称されている。組数は一定ではなく、『高山市史 上巻』によれば、享保 9（1724）年 4 月には、一之町村 10 組、二之町村 15 組、三之町村組 12 組、計 37 組が存在した（高山市 1981: 303）。町組頭が病気療養の場合や後継者が不在の場合など勤務が難しい場合は高山御役所の許可を得れば、「〇〇預り組」とし一時隣の町組頭に兼務を頼むことができた（高山市 1981: 306）。各村には町組頭を取りまとめる世襲の町年寄が配置されている。町年寄は、一之町村は矢嶋家、二之町村は川上家、三之町村は屋貝家が勤め、それぞれの町年寄が他の文書と共に宗門人別改帳を保管していた。

飛騨高山の宗門人別改帳は、現在飛騨高山まちの博物館（旧高山市郷土館）に所蔵されている。東京女子大学『論集』に収録された永田文子の卒

業論文⁸を速水融が発見し、この史料の存在を知り、佐々木陽一郎とともに高山市郷土館を訪ねマイクロフィルムに収めたと聞いている⁹。マイクロフィルムに収められている史料は、「高山一之町村宗門人別改帳」文政2（1819）年から明治4（1871）年まで、「高山二之町村宗門人別改帳」享保3（1718年）、享保4（1719）年、安永2（1773）年から明治4（1871）年まで、「高山三之町村宗門人別改帳」寛政5（1793）年、文化2（1805）年、文化10（1813）年、文化15（1818）年、文政10（1827）年、文政12（1829）年、明治4（1871）年、「高山照蓮寺門前寺内町村」文政8（1825）年、文政11（1828）年、天保2（1831）年、天保4（1833）年、天保6（1835）年、天保8（1837）年、天保12（1841）年、天保15（1844）年、弘化2（1845）、弘化5（1847）年、嘉永4（1851）年、嘉永7（1854）年、安政4（1857）年、安政7（1860）年、文久2（1862）年、元治2（1865）年、慶應2（1866）年、慶應4（1868）年である¹⁰。

2. 高山二之町村の宗門人別改帳の特徴

前述したとおり、高山二之町村の宗門人別改帳は享保3（1718年）、4（1719）年、安永2（1773）年から明治4（1871）年まで、計101年分が残存している。本研究では安永2（1773）年から明治4（1871）年まで欠年が一年もなく、99年間連続している期間の宗門人別改帳からBDSの作成を開始した。

『高山市史 上巻』には、「安永2年より明治4年までの高山二之町村の『宗門人別改帳』が、袋入りで90数袋ある」と記されている（高山市1981:293）。安永2（1773）年については、表題「安永二年己二月 二之町宗門改帳」と書かれた町年寄川上斎右衛門の署名入りの袋に13冊の宗門人別改帳が入っている。袋は後年新たに作成されたものが使用されているが、表題と署名の箇所は切り取られ、袋に張り付けられている。当時袋の中に13冊がどのような順番で入っていたのかは不明である。二之町村の宗門

人別改帳は、村単位で作成されているわけではなく、編纂は、基本的には組単位である¹¹。各組の宗門人別改帳の表題は、定式化されているわけではない。また、宗門人別改帳は基本的には組単位で作成されているが、年により組別宗派別に作成されたり、宗派別に作成されたり、数組が合冊で綴じられている場合もある。二之町村の宗門人別改帳は「現住地主義」で書かれている。したがって、ここではその年に実際に二之町村で暮らしていた人を観察することになる。

本稿では、整理が終了した安永 2 (1773) 年から寛政 12 (1800) 年までの宗門人別改帳を観察する。二之町村の宗門人別改帳は連続して 99 年分存在するが、本稿の観察期間では、安永 2 (1773) 年の上川原町松田屋吉右衛門組と天明 2 (1782) 年の二之町米屋治兵衛組の宗門人別改帳が欠けている。本稿は、この期間の二之町村の宗門人別改帳の特徴を明らかにすることが目的なので、欠落している組の人口や戸数の補正はおこなっていない。

二之町村の宗門人別改帳のまとめ方は一定しているわけではないので、まず、この期間の宗門人別改帳の組名、まとめ方、記載事項を整理しておきたい。

表 1 は、安永 2 (1773) 年から寛政 12 (1800) 年までの宗門人別改帳の組名の変遷を追ったものである。前述した通り、安永 2 (1773) 年の宗門人別改帳は一組分の欠落があるので、安永 3 (1774) 年の宗門人別改帳に記載されている組名を観察する。預り組を含め二之町 9 組 (四瀧屋孫兵衛組、林屋利兵衛組、林屋利兵衛預り組、米屋治兵衛組、高桑屋与右衛門組、高桑屋与右衛門預り組、和泉屋勘兵衛組、福嶋屋五右衛門組、浅野屋喜右衛門組)、二之新町 1 組 (谷屋九兵衛組)、東川原町 2 組 (村田屋惣兵衛組、林屋兵右衛門組)、西川原町 1 組 (中村屋治助組)、上川原町 1 組 (松田屋吉右衛門組)、中川原町 1 組 (中村屋治助組)、下新町 1 組 (直井屋七兵衛組)、計 7 町 16 組である。この組別の宗門人別改帳は、町組頭の交代や組

飛驒国高山二之町村の宗門人別改帳

表 1 二之町村町組名(安永2年～寛政12年)*

		①	②	③	④	⑤	⑥
和暦	西暦	式之町	式之町	式之町	式之町	式之町	式之町
安永 2	1773	四瀧屋孫兵衛組	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	高桑屋与右衛門組 高桑屋与右衛門預り組	和泉屋勘兵衛組	福嶋屋五右衛門組
安永 3	1774	四瀧屋孫兵衛組	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	高桑屋与右衛門組 高桑屋与右衛門預り組	和泉屋勘兵衛組	福嶋屋五右衛門組
安永 4	1775	四瀧屋孫兵衛組	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	高桑屋与右衛門組 高桑屋与右衛門預り組	和泉屋勘兵衛組	福嶋屋五右衛門組
安永 5	1776	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	高桑屋与右衛門組 高桑屋与右衛門預り組	和泉屋勘兵衛組	宇野屋兵右衛門組
安永 6	1777	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	宇野屋兵右衛門組
安永 7	1778	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	宇野屋兵右衛門組
安永 8	1779	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	宇野屋兵右衛門組
安永 9	1780	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	土田屋小左衛門
安永 10	1781	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	土田屋小左衛門
天明 2	1782	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	—	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	土田屋小左衛門
天明 3	1783	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	土田屋小左衛門
天明 4	1784	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	土田屋小左衛門
天明 5	1785	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	土田屋小左衛門
天明 6	1786	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組 林屋利兵衛預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	和泉屋勘兵衛組	布目屋善助組
天明 7	1787	村瀬屋孫兵衛	加賀屋善三郎預り組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	田中屋長二平組	布目屋善助組
天明 8	1788	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	田中屋長二平組	布目屋善助組
天明 9	1789	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	田中屋長二平組	布目屋善助組
寛政 2	1790	村瀬屋孫兵衛	林屋利兵衛組	米屋治兵衛組	加賀屋善三郎組	田中屋長二平組	布目屋善助組
寛政 3	1791	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治兵衛組	小嶋屋清左衛門組	田中屋長二平組	布目屋善助組
寛政 4	1792	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	鶴屋幸四郎組
寛政 5	1793	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	鶴屋幸四郎組
寛政 6	1794	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	鶴屋幸四郎組
寛政 7	1795	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	鶴屋幸四郎組
寛政 8	1796	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	米屋治八郎預り組
寛政 9	1797	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	米屋治八郎預り組
寛政 10	1798	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	米屋治八郎預り組
寛政 11	1799	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	米屋治八郎預り組
寛政 12	1800	長瀬屋弥兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治八郎組	小嶋屋清左衛門組	岡本屋清七組	米屋治八郎預り組

表 1 二之町村町組名 (安永 2 年～寛政 12 年) *

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	町年寄	町年寄支配
式之町村	式之新町	東川原町	東川原町	西川原町	上川原町	中川原町	下新町		
浅野屋喜右衛門組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	—	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	—
浅野屋喜右衛門組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋吉右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	—
浅野屋喜右衛門組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	—
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	—
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	—
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	—
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	村田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋文七組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	谷屋九兵衛組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上齋右衛門	町年寄支配
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	林屋兵右衛門預り組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	山田屋忠治組	山田屋忠治預り組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	下村屋次右衛門	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	山田屋忠治組	山田屋忠治預り組	中村屋治助組	松田屋彦右衛門組	中村屋治助組	福田屋弥兵衛組	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	山田屋忠治組	山田屋忠治預り組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	佐口屋善藏預り組	佐口屋善藏組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	佐口屋善藏預り組	佐口屋善藏組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	佐口屋善藏預り組	佐口屋善藏組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	小島屋長三郎組	小島屋長三郎預り組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	小島屋長三郎組	小島屋長三郎預り組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	—	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	小島屋長三郎組	小島屋長三郎預り組	中村屋治助組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋治助組	直井屋七兵衛組	川上四郎九郎	—
辻屋卯兵衛組	今井屋藤七組	小島屋長三郎組	小島屋長三郎預り組	中村屋太兵衛組	長瀬屋喜右衛門組	中村屋太兵衛組	直井屋七兵衛組	川上四郎九郎	—

* 上田美枝子作成

飛騨国高山二之町村の宗門人別改帳

表 2 二之町村町組名 (安永 2 年～寛政 12 年) *

		①	②		③	④		⑤	⑥
和暦	西暦	式之町	式之町		式之町	式之町		式之町	式之町
安永 2	1773	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別
安永 3	1774	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別
安永 4	1775	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別
安永 5	1776	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別
安永 6	1777	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組内宗派別
安永 7	1778	宗派別 (真言、修験宗、浄土宗、法花宗、禪宗、浄土真宗)							
安永 8	1779	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組別	組別
安永 9	1780	組別	組別		組別	組別		組別	組別
安永 10	1781	組別	組別		組別	組別		組別	組別
天明 2	1782	組内宗派別	組内宗派別		—	組別		組内宗派別	組別
天明 3	1783	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
天明 4	1784	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
天明 5	1785	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
天明 6	1786	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
天明 7	1787	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
天明 8	1788	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
天明 9	1789	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
寛政 2	1790	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組内宗派別
寛政 3	1791	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組内宗派別
寛政 4	1792	組内宗派別	組内宗派別		組内宗派別	組別		組内宗派別	組別
寛政 5	1793	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別		組内宗派別	組内宗派別
寛政 6	1794	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別		組内宗派別	組内宗派別
寛政 7	1795	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別
寛政 8	1796	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別
寛政 9	1797	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別
寛政 10	1798	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別
寛政 11	1799	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別
寛政 12	1800	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別

表 2 二之町村町組名 (安永 2 年～寛政 12 年) *

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭		
式之町村	式之新町	東川原町	東川原町	西川原町	上川原町	中川原町	下新町	町年寄	町年寄支配
組別	組別	組別	組別	組別	—	組別	組別	—	—
組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	—
組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	—	—
組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	—	—
組内宗派別	組内宗派別	組別	組内宗派別	組別	組別	組別	組別	組別	—
宗派別 (真言、修験宗、浄土宗、法花宗、禪宗、浄土真宗)								組別	—
組別	組別	組別	組別	組内宗派別	組内宗派別		組別	組別	—
組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別重複あり
組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別	組別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組別	組別	組内宗派別	組別	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	—	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組内宗派別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	組別
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	—	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	—	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	—	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—
組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組内宗派別	組別	—

* 上田美枝子作成

の統合はあるが、明治4(1871)年まで追跡することができる。ただし、観察ではその後の統合を鑑み、二之町の林屋利兵衛組と林屋利兵衛預り組、そして高桑屋与右衛門組と高桑屋与右衛門預り組をそれぞれまとめ、一つの組として扱っている(7町14組)。

表2は安永2(1773)年から寛政12(1800)年までの宗門人別改帳の編纂方法を整理したものである。安永2(1773)年から安永5(1776)年までは組別に分冊されているが、安永6(1777)年以降、組内で宗派別にまとめるという形式が見られるようになり、安永7(1778)年には二之町村すべてを宗派別(真言宗、修験宗、浄土宗、法花宗、禅宗、浄土真宗)に記載する形式に変わっている。しかし、この形式がその後も続くわけではなく、翌年には組内宗派別記載と組別の記載になっている。このように、二之町村の宗門人別改帳のまとめ方は、一定しているわけではない。この点が二之町村宗門人別改帳の特徴ということになる。なお、町年寄川上屋(川上齋右衛門)は、宗門自分一札として川上屋のみの宗門人別改帳を作成している¹²⁾。また、安永9(1780)年から天明9(1789)年の間は二之町村瀬屋孫兵衛組の3戸、二之町土田屋小左衛門組の3戸、二之町米屋治兵衛組の5戸の計11戸が各組の宗門人別改帳から除され、町年寄支配として、この11戸のみの独立した宗門人別改帳が作成されている。このように表題、編纂の単位、さらに編纂方法は一定しているわけではないが、宗門人別改帳の記載事項は一貫している。一筆ごとに宗旨、旦那寺、持高(安永3年以降)、家持・借家・家守・地借の別、名前、続柄、年齢、移動記録(移入者に対しては出身地、移出者に対しては行き先の記載)、一筆のメ人数、家請人記載、外書きには屋敷の売り買い、町内を含めた引越し先、あるいは引越し元、そして帳末には合計人数と安永3年以降は合計石高数が記載されている。宗門人別改帳への記載内容が豊富でしかも詳細である点も特徴の一つといえよう。

3. 二之町村の人口と世帯数

表 3 は、観察期間の男女別人口を、図 1 はこれを棒グラフで示した¹³。
 先行研究では、この観察期間について佐々木陽一郎が二之町村の人口を概

表 3 二之町村人口・家数・世帯規模（安永 2 年～寛政 12 年）*

和暦	西暦	男性(人)	女性(人)	合計(人)	性比	家数(軒)	平均世帯規模(人)
安永 2**	1773 年	1130	1088	2218	103.9	619	3.6
安永 3	1774 年	1366	1313	2679	104.0	740	3.6
安永 4	1775 年	1378	1314	2692	104.9	740	3.6
安永 5	1776 年	1391	1330	2721	104.6	754	3.6
安永 6	1777 年	1393	1331	2724	104.7	757	3.6
安永 7	1778 年	1362	1286	2648	105.9	755	3.5
安永 8	1779 年	1343	1271	2614	105.7	748	3.5
安永 9	1780 年	1355	1288	2643	105.2	755	3.6
安永 10	1781 年	1386	1319	2705	105.1	762	3.6
天明 2***	1782 年	1288	1227	2515	105.0	719	3.6
天明 3	1783 年	1406	1320	2726	106.5	772	3.6
天明 4	1784 年	1378	1285	2663	107.2	756	3.6
天明 5	1785 年	1346	1262	2608	106.7	729	3.6
天明 6	1786 年	1329	1289	2618	103.1	727	3.7
天明 7	1787 年	1299	1262	2561	102.9	717	3.6
天明 8	1788 年	1230	1185	2415	103.8	675	3.6
天明 9	1789 年	1217	1186	2403	102.6	666	3.7
寛政 2	1790 年	1224	1208	2432	101.3	677	3.6
寛政 3	1791 年	1277	1227	2504	104.1	682	3.7
寛政 4	1792 年	1294	1251	2545	103.4	689	3.7
寛政 5	1793 年	1347	1308	2655	103.0	696	3.8
寛政 6	1794 年	1396	1372	2768	101.7	708	3.9
寛政 7	1795 年	1439	1383	2822	104.0	712	4.0
寛政 8	1796 年	1464	1407	2871	104.1	722	4.0
寛政 9	1797 年	1466	1403	2869	104.5	717	4.0
寛政 10	1798 年	1480	1429	2909	103.6	729	4.0
寛政 11	1799 年	1517	1465	2982	103.5	735	4.1
寛政 12	1800 年	1509	1466	2975	102.9	726	4.1

*町年寄川上屋の史料は、安永 2, 4, 5 年、天明 3 年、寛政 5, 8, 10 年欠年
 町年寄支配の史料は安永 9 年から天明 9 年までの 10 年間のみ。

**上川原町松田屋吉右衛門組欠年

***式之町米屋治兵衛組欠年

飛騨国高山二之町村の宗門人別改帳

表4 二之町村年別組別人口（単位：人）

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
		武之町	武之町	武之町	武之町	武之町	武之町	武之町村
和暦	西暦	四瀧屋孫兵衛組	林屋利兵衛組	米屋治兵衛組	高桑屋与右衛門組	和泉屋勘兵衛組	福嶋屋五右衛門組	浅野屋喜右衛門組
安永 2**	1773 年	146	127	219	98	91	71	65
安永 3	1774 年	147	124	263	104	87	95	64
安永 4	1775 年	149	132	264	100	95	87	56
安永 5	1776 年	149	132	248	109	101	81	56
安永 6	1777 年	144	130	233	104	95	76	58
安永 7	1778 年	143	129	220	93	101	72	53
安永 8	1779 年	134	139	218	93	95	67	59
安永 9	1780 年	115	139	194	91	98	57	52
安永 10	1781 年	126	139	196	103	96	50	59
天明 2***	1782 年	126	129		108	94	50	53
天明 3	1783 年	124	135	203	95	100	43	54
天明 4	1784 年	114	133	208	89	98	44	58
天明 5	1785 年	103	84	161	62	91	35	45
天明 6	1786 年	116	100	166	67	93	35	43
天明 7	1787 年	103	115	172	74	94	34	46
天明 8	1788 年	106	113	171	97	91	35	44
天明 9	1789 年	103	113	186	100	86	35	43
寛政 2	1790 年	128	107	196	96	92	55	45
寛政 3	1791 年	139	111	210	106	107	54	51
寛政 4	1792 年	130	119	206	100	106	52	54
寛政 5	1793 年	122	125	225	109	109	56	50
寛政 6	1794 年	130	134	249	114	111	62	54
寛政 7	1795 年	126	132	243	116	118	67	53
寛政 8	1796 年	122	126	249	136	107	73	55
寛政 9	1797 年	135	128	231	141	94	50	25
寛政 10	1798 年	136	133	232	143	93	41	27
寛政 11	1799 年	127	142	240	131	101	44	31
寛政 12	1800 年	133	135	223	136	93	45	39

*町年寄川上屋の史料は、安永 2、4、5 年、天明 3 年、寛政 5、8、10 年欠年

町年寄支配の史料は安永 9 年から天明 9 年までの 10 年間のみ

**上川原町松田屋吉右衛門組欠年

***武之町米屋治兵衛組欠年

表 4 二之町村年別組別人口（単位：人）

⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
式之新町	東川原町	東川原町	西川原町	上川原町	中川原町	下新町	町年寄*	合計
谷屋九兵衛組	田屋惣兵衛組	林屋兵右衛門組	中村屋治助組	松田屋吉右衛門組	中村屋治助組	直井屋七平組	町年寄支配	
128	265	129	293		171	415		2218
132	270	129	283	401	154	420	6	2679
143	265	130	272	388	166	445		2692
133	272	146	262	413	154	465		2721
123	276	143	257	417	158	502	8	2724
122	266	133	273	402	153	481	7	2648
123	269	131	252	396	153	477	8	2614
117	255	136	260	417	135	498	79	2643
125	238	137	272	442	135	509	78	2705
121	260	130	262	441	139	519	83	2515
124	263	123	271	441	155	518	77	2726
118	258	138	241	442	148	489	85	2663
115	249	143	254	492	158	530	86	2608
113	237	134	249	502	157	519	87	2618
110	226	136	267	464	134	496	90	2561
106	229	121	268	455	128	370	81	2415
98	219	129	256	450	123	383	79	2403
106	214	143	297	417	125	400	11	2432
103	234	134	292	420	116	419	8	2504
109	229	157	309	426	107	433	8	2545
110	245	164	314	448	121	457		2655
114	256	149	340	458	120	469	8	2768
117	265	157	359	462	114	485	8	2822
127	256	173	359	458	128	502		2871
116	264	171	372	479	135	520	8	2869
113	262	165	392	496	140	536		2909
119	267	166	381	517	145	562	9	2982
122	271	166	395	507	144	557	9	2975

飛騨国高山二之町村の宗門人別改帳

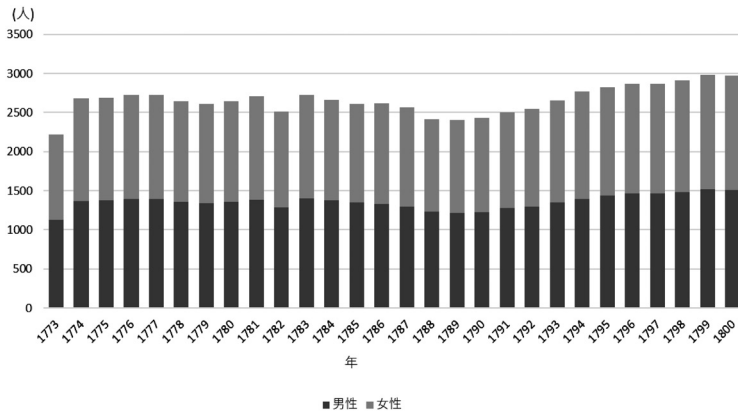


図1 二之町村性別人口の推移*** **

*町年寄川上屋の史料は、安永2、4、5年、天明3年、寛政5、8、10年欠年

町年寄支配の史料は安永9年から天明9年までの10年間のみ、

**上川原町松田屋吉右衛門組(安永2年欠年)

***武之町米屋治兵衛組(天明2年欠年)

観した際に第Ⅰ期(1773-1800年)とし、「三回の人口大減少期を含みつつ、全体として増加傾向」にあると観察している(佐々木1969:106)。

観察期間の二之町村の人口は、最大が寛政11(1799)年の2,982人であり、最小は寛政元(1789)年の2,403人である¹⁴。まず、大きな流れとしてこの期間の人口は、寛政元(1789)年までは減少、その後人口は増加傾向に転じる。この流れを詳細に観察すると、前後の年と比べ安永2(1773)年と天明2(1782)年の人口が少なく、安永7(1778)から安永8(1779)年、天明4(1784)年から寛政元(1789)年までは人口が連続して減少している(図1)。安永2(1773)年の人口が翌年より少ない理由は、上川原町松田屋吉右衛門組の宗門人別改帳が欠けていることによる。この組の人口は400人程度であり、これを参照すればこの年の二之町村の人口は翌年と比較して大きな差はないものと判断できる。同様に、天明2(1782)年も二之町米屋治兵衛組の宗門人別改帳(約200人分)が欠けており、これを仮に加えれば前後の年と大きな増減は見られない。したがって、この観

察期間の人口減少期は、安永 7 (1778) から安永 8 (1779) 年までと天明 4 (1784) 年から寛政元 (1789) 年までである。特に天明 4 (1784) 年から寛政元 (1789) 年まで、人口減少直前の天明 3 (1783) 年の人口 2,726 人から底をつく寛政元 (1789) 年の 2,403 人に向け 6 年連続して人口は減少し、この間の減少数は 323 人におよぶ。この大幅な人口減少を経験した後、寛政 2 (1790) 年以降は、徐々に人口は回復し、寛政 5 (1793) 年からは観察期間の最終年である寛政 12 (1800) 年に向けて一気に人口は増加していく。

この 2 つの人口減少期について、組別人口の推移をみると、すべての組で同じような人口減少が起こっているわけではないことが分かる。組別人口の推移を観察する前に、組別の人口について見ておきたい。表 4 に示した通り、組により人口数に大きな違いが見られる。安政 3 (1774) 年の各組人口をみると、400 人を超える規模の人口を抱えるのは、⑫上川原町松田屋吉右衛門組と⑭下新町直井屋七兵衛組、200 人から 300 人規模は、③二之町米屋治兵衛組、⑨東川原町村田屋惣兵衛組、⑪西川原町中村屋治助組である。100 人台の人口を抱えるのは①二之町四瀧屋孫兵衛組、②二之町林屋利兵衛組、④二之町高桑屋与右衛門組 (預り組を含む)、⑧二之町新町谷屋九兵衛組、⑩東川原町林屋兵右衛門組、⑬中川原町中村屋治助組、100 人未満の人口規模の組は、⑤二之町和泉屋勘兵衛組、⑥二之町福嶋屋五右衛門組、⑦二之町浅野屋喜右衛門組、である。このようにみえていくと、本町である二之町の人口規模は小さく、新たに加わった町組の人口規模が比較的大きい (以下、組名は略し番号のみで記すこととする) ことがわかる。

さて、人口の減少期であった、安永 7 (1778) から安永 8 (1779) 年までと天明 4 (1784) から寛政元 (1789) 年までの組別の人口変動を確認してみよう。小規模の人口減少が確認できた安永 7 (1778) と安永 8 (1779) 年の 2 年間の各組の人口変化をみると、①③⑥⑩⑫⑭で前年に比べ 2 年連続

して人口が減少している。それ以外の組では異なる傾向が見られる。

次に、急激な変化が見られる天明 8 (1788) 年に目を移すと、①④⑥⑧⑨⑪を除く 9 組で前年と比べ人口が減少している。特に⑭下新町直井屋七兵衛組の人口は前年の 496 人から 370 人に 126 人減少し、これが全体の人口減に大きな影響を及ぼしていることが分かる。この組の人口規模は二之町村では最も大きく、その変化が全体に及ぼす影響が大きいことは注意しなければならない。その後、⑭の人口は、天明 8 (1788) 年を底に順調に回復し、観察最終年に向けて増加に転じている。天明 8 (1788) 年に人口減少を経験している⑤⑦⑧⑫⑬は寛政元 (1789) 年も人口減少が続き、②は前年の人口を維持、③と⑩は人口が増えている。ここから、天明 8 (1788) 年の大規模な人口減少は⑭の人口の急激な減少が大きく影響していること、他の組もその前後で人口減少が目立ち、組による違いはあるが二之町村全体として人口が減少したといえよう。

安永 7 (1778) から安永 8 (1779) 年にかけて人口が減少した理由についての記述は見当たらないが、天明 4 (1784) 年以降の人口が減少した理由を推測する記述が『高山編年史要』にある。天明 4 (1784) 年「3 月 20 日。是夜高山一之町今見屋藤左衛門失火し、三町不残、戸数二千三百四十軒、照蓮寺はじめ十一ヶ寺焼失す（岡村利平 1980 (1921): 318)」。続けてこの年の春には、米価が暴騰し「細民は松の皮を剥ぎ、葛の根、蕨の根を掘りて食す」と記されており、この年の大きな災害が人口減少に影響を与えたものと推察される（岡村利平 1980 (1921): 318）。この大火の後、復旧途中の寛政 8 (1796) 年 7 月にも三之町では火災が発生し安川通以南 442 戸が焼失している（岡村 1980 (1921): 330）。

次に、「男女別では女性がわずかながら男性を上回った。これは男性の方が多い通常城下町とは異なる特徴であり、武士がいなくなった商業中心都市・高山らしさがここに現れている」という高山町の人口に関する大変興味深い記述がある（林 2018: 36）。観察期間の性比を観察してみよう。

表 3 をみると本稿の観察期間中は、女性が上回ることはなく、男性が女性を上回っている。その差は、最高が天明 4 (1784) 年の 107.2, 最低は寛政 6 (1794) 年の 101.3 である。性比が最も大きい天明 4 (1784) 年の前後の年も 106 を上回り、この 3 年間の男性過多が目を引く。観察期間の全体的な推移をみれば、観察開始年から徐々に男性の数が増え、天明 5 (1785) 年を境に性比は漸減し、103 から 104 あたりを推移する。幕府の『全国人口調査』から得られる天明 6 (1786) 年の全国の性比が 111.6 (飛騨国: 110.5), 寛政 4 (1792) 年が 109.9 (飛騨国: 109.2), 寛政 10 (1798) 年が 110.3 (飛騨国: 108.3) である。これらと比較すると、観察期間を通し二之町村の較差は小さい¹⁵。

臼井竹次郎らは、本来の値はわからないが「明治期における出生性比は 103, あるいは 104 程度のものであろう」と述べている(臼井・他 1980: 176)。これに従えば二之町村の観察期間の性比は、明治期の出生性比に近く、その較差が小さいことが特徴といえよう。

戸数の観察に移ろう。宗門人別改帳を史料に用いて、世帯あるいは家族を研究する際の最大の問題は、記載単位(一筆)の問題である。歴史人口学では、これを世帯とみなしてきたが、この記載単位を世帯と仮定することに対しては批判がある(大石 1968, 高橋 2003)。飛騨高山の宗門人別改帳には、一筆ごとに持高の記載があること、「家持」「借家」といった記載があること、「借家」の場合には家請人の氏名が記載されていることからこれを世帯と仮定することは可能だと考え本稿では記載単位を世帯とするが、この問題は今後の課題として残しておきたい。

元禄 8 (1695) 年 3 月の『屋舗御検地帳』による二之町村の屋敷数は 376 (内訳 二之町 222, 一之新町 42, 二之新町 35, 下新町 50, 八幡町 27) である(高山市 1981: 114-115)。観察期間中の二之町村の世帯数は表 3 に示した。欠年である安永 2 (1773) 年の上川原町松田屋吉右衛門組の翌年の世帯数は 59, 天明 2 (1782) 年二之町米屋治兵衛組の前年の世帯数が 21,

翌年の世帯数が22である。これらを参考にすると、安永3(1773)年の世帯数は660程度、天明2(1782)年の世帯数は740程度とみなすことができる。安永2(1773)年の世帯数は欠年分の世帯数を加えたとしても、安永3(1774)年の世帯数が740であることからかなり少ない。世帯数は安永3(1774)年以降700を超え、わずかに増減し天明3(1783)年観察期間最大の772世帯に達する。その後世帯数は減少を続け寛政元(1789)年最少の666世帯となるが、この年を境に観察終了年に向けて増加に転じ、観察最終年の寛政12(1800)年には726世帯まで持ち直している。人口の大幅な減少を観察した時期に世帯数も減少しているが、世帯数は人口の底となった年から3年遅れて寛政元(1789)年に最少の数値となっている。この点以外は、観察期間中、多少の増減は見られるが大きな変化があるとはいえない。

二之町村の宗門人別改帳には、家持、借家といった居住形態の記載があるので、これを用いて居住形態別に世帯数の推移を観察しよう(図2)。本稿では、居住形態を家持、借家、その他に分類している。家持は所有地に家屋を所有し居住するものであり、借家は本庄栄太郎の分類によれば店借人にあたる(本庄栄太郎1949)。店借人は「土地居住を共に借りて居住す

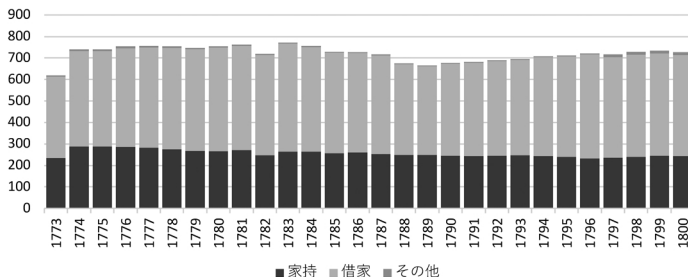


図2 二之町村家持・借家別世帯数の推移* ** ** **

*町年寄川上屋の史料は、安永2、4、5年、天明3年、寛政5、8、10年欠年

町年寄支配の史料は安永9年から天明9年までの10年間のみ。

**上川原町松田屋吉右衛門組(安永2年欠年)

***武之町米屋治兵衛組(天明2年欠年)

る者（本庄栄太郎 1949: 121）」である。「その他」は、家守、地借り、監坊、神明宮守といった「家持」と「借家」以外の世帯とした。しかし、家守と地借りを同じ分類に入れることには問題がある。家守は、「地主の地所・家屋を管理し、地主のために地代や家賃を集めるもので、町役もつとめた（本庄栄太郎 1949: 121)」。これに対して地借りは「他人の土地を借りて自己の居住土蔵等を営むもの（本庄 1949: 121)」である。家持、家守は町政に参加する権利を持っていたが、借家（店借人）と地借りは「町政に参加する権利もなかった代わりに、町費を負担する義務もなかった（本庄 1949: 121)」。したがって、家守を家持と同じ分類に、地借りを借家と同じ分類に入れ作業を進めることを今後検討したい。どちらにしても観察期間を通し、その他に分類した世帯数は少ないので、ここでは家持と借家を比較し、その世帯数の推移を観察することにした。観察期間を通し、家持の世帯数は 230 から 280 の間、世帯全体の 32 % から 39 % の間を推移し、安定的である。これに対して、借家は各年家持の倍程度の数をしめ、借家の増減により全世帯数に変化がみられることが分かる。

次に、世帯規模を観察する（図 3）。観察期間を通した全世帯の平均世帯規模は 3.7 人である。これを年別に観察すると、多少の増減はあるが観察初年の平均世帯規模 3.7 人から変化はないが、寛政 7（1795）年に 4.0 人に増加し、観察最終年の寛政 12（1800）年は 4.1 人になる。微増ではあるが増加傾向にあったといえるだろう。さて、大きな人口減少期の世帯規模をみても、世帯規模には変化はみられない。ここから、人口の大きな減少は個人の移動、あるいは死亡により生じたのではなく、引っ越しなどを理由とする世帯の消滅がその原因であったという仮説をたてることができるだろう。

最後に、世帯規模を家持、借家、その他別に観察しよう。ここでもその他のケース数が少ないので、観察から外し、家持と借家のみを比較することにしたい。観察期間全体を通し、平均世帯規模は家持の方が大きい。最

大の差は、安永3（1774）年の家持4.4人、借家3.1人でここには1.3人の差がある。しかし、それ以降は世帯規模の差は観察最終年まで1人程度であり、その差を維持し続けながら、観察最終年に向けて両者の世帯規模は微増ではあるが拡大している。観察最終年の平均世帯規模は、家持が4.7人、借家が3.8人である。

むすびにかえて

本稿では、安永2（1773）年から寛政12（1800）年までの高山二之町村の宗門人別改帳の特徴と人口・世帯数を観察した。

二之町村の宗門人別改帳は、基本的には組を単位にまとめられているが、年によって宗派別にまとめられたり、組別宗派別にまとめられたり、いくつかの組が合冊になっていた。まとめ方に一貫性は見られない。しかし、記載内容については一貫しており、その内容は詳細にわたり、充実している。特に、持高の記載と家持、借家といった居住形態の記載は、今後の観察で世帯をいくつかの階層に分ける際、指標の精細さを確保するのに

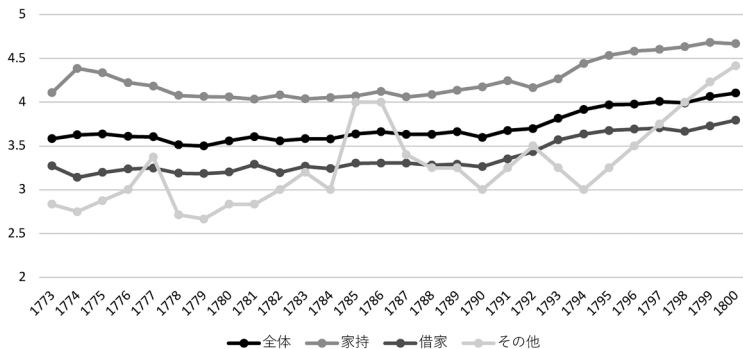


図3 二之町村家持・借家・その他別世帯規模の推移* ** ***

*町年寄川上屋の史料は、安永2、4、5年、天明3年、寛政5、8、10年欠年

町年寄支配の史料は安永9年から天明9年までの10年間のみ、

**上川原町松田屋吉右衛門組（安永2年欠年）

***武之町米屋治兵衛組（天明2年欠年）

役立つだろう。

観察期間の人口は、2回にわたる人口減少期が認められ、特に天明4(1784)年から寛政元(1789)年にかけては大きな人口減少が認められた。大火災と飢饉の影響が強かったものと思われる。しかし、この期間を含め組別の人口趨勢を観察すると、同じ二之町村の中でも同じ傾向が確認できるわけではなかった。男女別人口は、観察初年から大きな人口減少期の最初の3年間までは男性の人口数が増加し続けるが、この期間を除けば、観察期間を通し男性の方が多いものの、その差は幕府の『全国人口調査』から得られた性比と比較すれば、較差は小さかった。二之町村には、女性を必要とする社会構造が存在した可能性がある。

観察期間を通して、世帯数は700前後を推移していた。世帯数も、大火災と飢饉の時期に減少しているが、人口の減少と比較すると底をつくのは3年遅れている。世帯数を居住形態別に観察した結果、家持の世帯には大きな増減は見られず、借家は観察期間を通し常に家持の倍近い戸数であり、また増減が多きかった。平均世帯規模は3.7人であり、観察終了年に向けて微増傾向であった。また、家持の方が借家の平均世帯規模よりも大きく、観察期間を通しその差が縮まることはなかった。

本研究は、まだ個人のデータベースが完成しておらず、人口動態の観察には手が付けられていない。この点が今後の課題となる。また、二之町村では家持が安定的に屋敷を所有しているわけではなく、質に流したり、また質流れの屋敷を借家住まいの者が所有したり、その入れ替わりも大きい。これこそが二之町村の特徴だと思われるので、この観察も今後の課題にしたい。

謝辞

飛騨高山のマイクロフィルムをデジタル化するには慶應義塾大学名誉教授故速水融先生に大変お世話になりました。飛騨高山の研究に情熱を

もって邁進し続けられた千葉大学名誉教授故佐々木陽一郎先生が最晩年に基礎シート（BDS）を託して下さいなのにすぐに活用することができなかったことを大変申し訳なく思っています。速水先生と何回も相談し最終的に基礎シートを作成し直すことになりましたが、この複雑な二之町村の基礎シートの作成は上田美枝子さんの多大なご尽力なくしてはありえません。本来ならば、共同執筆者になって頂くべきなのですが、『哲学』の規程でそれができませんでした。ここに上田さんが共同執筆者に値する労を取って下さっていることを明記し、深く感謝申し上げます。また、岡田研究会の村井恭彪君、笠原旦君には入力作業の協力を得ました。なお、本研究は、2021年度福澤基金研究補助「近世都市飛騨高山の人口と家族～宗門改帳を史料として」、科学研究費補助金基盤研究（C）研究課題番号 MKK372J「近世都市飛騨高山の人口と家族～宗門改帳を史料としたデータベース構築にむけて～」を受けています。本稿はその成果の一部であることを明記します。

註

- ¹ 宗門改帳はキリスト教禁教を目的とし、寛永15（1638）年幕府直轄地で作成が始まり、寛文5（1665）年あるいは寛文11（1671）年の法令以降、幕府領、私領を問わず作成が義務づけられ、日本に住む全員が制度の上では仏教徒として登録された。宗門改帳は明治4（1871）年まで原則として毎年作成された（速水融 1997: 54-68）。宗門改帳の表題は統一されていないため、本稿では総称して宗門改帳と記することにし、特定の地域の宗門改帳について論じる際は、その表題を記することにする。また、史料や史実に関わる論述については和暦と西暦を併記している。
- ² 近世都市人口の先行研究は、高橋美由紀によって詳しく整理されている（高橋美由紀 2005: 33-34）。また、都市史研究の動向は速水融（2009: 210-212）を参照されたい。
- ³ 時を同じくして、都市蟻地獄説と同じ人口メカニズムをイギリスではE.A. リグリー（E. A. Wrigley 1969）が発見し「都市墓場説（urban graveyard theory）」と称した。正確には、シャーリンは、都市墓場説に対する修正仮説を提示したのだが、両説はほぼ同様であるので、本稿では、都市蟻地獄説に統一している。

- 4 飛騨高山の宗門改帳の表題は、統一されてはいないが、例えば『飛騨大野郡灘郷東川原町巳宗門改人別御改帳』といった記載が多数を占めている。そこで、本稿では飛騨高山の史料については宗門人別改帳と称することにする。
- 5 佐々木陽一郎は、宗門人別改帳に登場する人物について個人経歴ファイル(40,290人分)を作成し、日本の歴史人口学では初めて大型コンピュータを用いてデータ処理をし、人口指標について分析した(佐々木陽一郎: 1969, 2001-a)。氏が作成した基礎シート(BDS)は本研究では利用できなかったが、分析および研究には直接用いられておらず、氏の分析および研究の信頼性は担保される。
- 6 都市高山については、佐々木陽一郎(1969)(2001-b)を参照されたい。
- 7 それぞれの村には支村が含まれる。二之町村の支村は、『斐太後風土記』によれば、神明町、東川原町、上川原町、中川原町、西川原町、八軒町、二之新町、大新町である(蘆田伊人編 1968: 84)。なお、『斐太後風土記』は明治2年高山県知事宮原積によって計画された飛騨の地誌で、明治3年に各村からの報告が終了し、富田稯彦の編纂により明治6年に完成している(溝口常俊 2002: 295)。「斐太後風土記」制作の経緯は蘆田伊人編(1968: 3-7)に詳しい。
- 8 卒業論文のタイトルは、「飛騨國高山武之町村宗門人別改帳の分析」(笠(永田)文子 1959)。
- 9 1980年に撮影されたマイクロフィルム(全71巻: 68914コマ)は現在麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト室(代表: 黒須里美)に所蔵されている。
- 10 飛騨高山まちの博物館『高山町会所文書』目録(03. 戸籍)も参照されたい。
https://www.city.takayama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/001/021/machikaisyo.03.pdf
- 11 高山二之町の宗門改人別帳の特徴については、佐々木陽一郎(1969)を合わせて参照されたい。
- 12 宗門自分一札の例は、『岐阜県史 通史編近世下』p. 885を参照されたい。
- 13 各年の人口数は、笠(永田)文子(1959: 476)表1とも佐々木陽一郎(1969: 103)表3とも異なる。さらなる確認の必要性が残されていることを明記しておく。
- 14 表1では最小の人口は安永2(1773)年2,218人であるが、本文でも述べた通り、この年は上川原町松田屋吉右衛門組の宗門人別改帳が欠落しているため、観察から外している。
- 15 幕府の人口調査は、享保6(1721)年に開始し、享保11(1726)年以降は6年に一回全国の大名、代官に管轄下の人口数を報告させたものである(速水融 1982: 70-71)。現在12回分の存在が判明し、10回分については国別男女別の人口数がわかる(速水 1993: 1-10)。

参考文献

- 蘆田伊人編, 1968, 『大日本地誌体系 (41) 飛騨後風土記 第1巻』, 雄山閣.
- 岩橋勝, 1989, 「地方経済構造の地理学 — 『広域濃尾地方圏』の分析」, 新保博・斎藤修編, 『日本経済史2 近代成長の胎動』, 岩波書店.
- 上村木曾右衛門, 1917, 『飛騨国中案内』, 住伊書店.
- 臼井竹次郎, 方波見重兵衛, 福富和夫, 1980, 「出生性比の統計および死産統計」, 『公衆衛生院研究報告』29.
- 大石慎三郎, 1968, 『近世村落の構造と家制度』, 御茶の水書房.
- 大塚俊幸, 2018, 「集落・建築・住まいから見た飛騨高山」, 林上編著, 『飛騨高山地域の産業・社会・文化の歴史を読み解く』, 風媒社.
- 岡村利平, 1980 (1921), 『飛騨編年史要 (復刻発行)』, 住伊書店.
- 笠文字, 1959, 「飛騨国高山二之町村宗門人別改帳の分析」, 『史論』7号.
- 加藤正洋, 1998, 「近世～近代初期における飛騨国の人口趨勢 — 『空白の四半世紀』を中心に—」, 『信濃』第50巻第5号.
- 加藤正洋, 2001, 「近世地方都市における移入者の出身地分布 — 飛騨・高山町の場合—」, 『岐阜史学』97.
- 岐阜県, 1968, 『岐阜県史 通史編近世上』, 巖南堂書店.
- 斎藤修, 1987, 『商家の世界・裏店の世界 江戸と大阪の比較都市史』, リポート.
- 斎藤修, 1989, 「都市蟻地獄説の再検討 — 西欧の場合と日本の事例」, 速水融・斎藤修・杉山伸也編『徳川社会からの展望 発展・構造・国際関係』, 同文館.
- 斎藤修, 2002, 『江戸と大阪 近代日本の都市起源』, NTT出版.
- 佐々木陽一郎, 1969, 「飛騨国高山の人口研究 — 人口推移と自然的要因—」, 社会経済史学会編『経済史における人口: 社会経済史学会

- 第 37 回大会報告], 慶應通信.
- 佐々木陽一郎, 1977, 「江戸時代都市人口維持能力について —飛騨高山の経験値にもとづく一実験の結果—」, 社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めてその社会経済史的接近』, 東洋経済新報社.
- 佐々木陽一郎, 2001-a, 「歴史人口学とコンピュータ」, 『千葉大学経済研究』, 第 16 卷第 1 号.
- 佐々木陽一郎, 2001-b, 「飛騨高山の宗門人別帳 —人口史料としての宗門人別帳の史料批判と若干の結果—」, 『千葉大学経済研究』, 第 16 卷第 3 号.
- 佐々木陽一郎, 2002, 「飛騨高山の人口」, 『千葉大学経済研究』, 第 17 卷第 2 号.
- 佐々木陽一郎, 2003, 「飛騨国高山の人口推移」, 『千葉大学経済研究』, 第 18 卷第 2 号.
- 末田智樹, 2018, 「社会経済を主体的に担った有力商人」, 林上編著, 『飛騨高山 地域の産業・社会・文化の歴史を読み解く』, 風媒社.
- スミス, T. C., 1977, 「前近代の経済成長 —日本と西欧—」, 社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて —その社会経済史的接近』, 東洋経済新報社.
- 高橋美由紀, 2005, 『在郷町の歴史人口学 —近世における地域と地方都市の発展—』, ミネルヴァ書房.
- 高橋基泰, 2003, 「近世上田藩上塩尻村における家系図の『家族』と宗門改帳の『家族』 —系譜関係・親族関係・世代継承」, 『村落社会研究』, 第 10 卷, 第 1 号.
- 高山市, 1981, 『高山市史上巻 (復刻版)』, 高山印刷株式会社.
- 田中貢太郎編, 1925, 『岐阜県飛騨国大野郡史 中巻』, 升重書店.
- 坪内庄次, 1972, 「近世飛騨国高山町の人口分析 —近世飛騨国人口論第二報—」『歴史地理学紀要』 14.

- 友部謙一, 1999, 「近世都市長崎における人口衰退について ―その研究序説, 桶屋町 1742-1851 年」, 『三田会雑誌』第 92 巻第 1 号.
- 虎澤勇治, 1995, 「高山二之町村宗門帳に見る婚姻関係の断面」, 『紀要十周年記念号』, 飛騨民俗学.
- 長島雄毅, 2021, 「近世日本の人口移動に関する研究の展開 ―歴史人口学と歴史地理学の関わりから―」, 『立命館文學』第 672 号.
- 浜野潔, 2007, 『近世京都の歴史人口学的研究 都市町人の社会構造を読む』, 「慶應義塾大学出版会」.
- 速水融, 1982, 「近世奥羽地方人口の史的序論」, 『三田学会雑誌』75 巻 3 号, (『歴史人口学研究 新しい近世日本像』2009 年 藤原書店 第 12 章に再録).
- 速水融 (監修), 1993, 『国勢調査以前 日本人口統計集成 別巻 1』, 東洋書林.
- 速水融, 1997, 『歴史人口学の世界』, 岩波書店.
- 速水融, 2009, 『歴史人口学研究 新しい近世日本像』, 藤原書店.
- 速水融・内田宣子, 1971, 「近世農民の行動追跡調査 ―濃州西条村の奉公人」, 『研究紀要』昭和 46 年度, 徳川林政史研究所.
- 藤田苑子, 1992, 「解説」, ピエール・グベール著, 遅塚忠躬・藤田苑子訳 『歴史人口学序説 17・18 世紀ボーヴェ地方の人口動態構造』, 岩波書店.
- 松田之利・他, 2000, 『岐阜県の歴史』, 山川出版社.
- 溝口常俊, 2002, 『日本近世・近代の畑作地域史研究』, 名古屋大学出版会.
- 鷲崎俊太郎, 2001, 「近世末期絹織物業中心地の人口移動分析 ―武州多摩郡八王子横山宿におけるケーススタディー」, 『社会経済史学』66-6.
- Sharlin, A., 1978, “Natural decrease in early modern cities : A reconsideration”, *Past and Present*, 79. Wrigley, E. A., 1969, “Population and Hisory”, London.

(速水融訳『人口と歴史』筑摩書房, 1982年)

【参考資料】

飛騨高山まちの博物館編集, 2023, 『令和5年 春季特別展 三町を支え
候 「町会所文書」から紐解く町年寄』.